多職種連携とシステム科学

病院経営の本質に直結する、多職種連携の最新理論とその実践ノウハウ

中級【専門講座】6『多職種連携とシステム科学』

松下博宣 まつした・ひろのぶ ●東京情報大学大学院総合情報学研究科教授

早稲田大学商学部卒業後、コーネル大学大学院留学（修士）。東京工業大学にてシステム科学等を研究。博士（学術）。会社経営を行い、上場企業に売却してイグジットを果たす。東京農工大学教授を経て、現職。コンゴ民主共和国等で、医療サービスの継続的質改善、多職種連携、グローバルヘルスを病院、政府に指導。看護経済・政策研究学会理事等を歴任。

今、多職種連携やコラボレーションをシステムとして捉えることに注目が集まっています。なぜでしょうか――。

第1は地域包括ケアシステム。地域包括ケアシステム内での他機関、他組織、他システムとのコラボレーションです。病病連携、病診連携はおろか、保健、医療、福祉、介護、地方公共団体、NPO等との連携促進は待ったなしの状態です。

第2は患者安全。縦割りのタコツボに閉じこもる専門職では、患者安全を担保できません。医療過誤の原因の大半は、多職種間の役割分担、コミュニケーション、システムに起因するとされています。それ故に多職種連携やコラボレーションが注目されています。

第3は医療の質。安全と表裏一体の課題ですが、質も上げていこうとするとき、お題目の「チーム医療」ではなく、実体の伴う、効果のある多職種連携やコラボレーションにしていかなければ、質の向上は不可能です。

第4は効率。たとえば、在院日数と病床稼働率をバランスさせるためには入退院管理を含む多職種間の連携をシステム化する必要が生じます。

要するに、①地域包括ケアシステムの中で、自分たちのポジションを確立し、他システムとコラボレーションを進めながら、②患者安全を向上させ、③質を担保すると同時に、④効率（最終的には損益やキャッシュフロー）も高める、という4つの本質的な医療経営システムの課題を並立してバランスさせることが求められるのです。

ぜひ、本書を紐解き多職種連携やコラボレーションにおける最新システム理論や実践事例に触れていただきたいと思います。